



重修真書太閤記

九編

二



へ3特
459
82

消
福
流

重修真書太閤記九編卷之四

北越の諸將難戦の事

并羽柴方七雄鎗先高名の事

羽柴筑前守秀吉の機を見て變ふ應とてと猿猴の
梢と傳ふ如くとせし許されし名将なれば今日
北越の大軍と見て少くも恐怖の色なく時と刻と
を見計ひ近習馬廻り以下と真先と進めく下知わ
りけるし剛将の下は弱兵なりと諺ふゆへに如く
幕下の諸勇士のつとも一騎當千の力の共故大
將の麾に從ひ我先と馳出し九曲の坂道と事と

同
攻
會
印

太閤記九編卷四

26
3
78

もせり勇之進んで北國勢と追うけり戦ひける中
も伊木半七今年十七歳櫻井九吉今年十八歳共お
筑前守の小姓ありけるり大太刀と真甲よめさし
多勢の中ふ駈向ひ相手とさうそり切立薙立戦ひ
ける石川兵助と此二人と合とて賤岳の三振刀と
よはさしも理あれぬ北越の軍兵心いやさげよこ
やととも大崩と崩とさうり軍故誰一人踏止り
切まくる勢もなしく次第くも裏崩とて立直ひへ
る体もなしく終よ名ある輩までも平押しあされて
逆行けると是非もなしく佐久間侍も大崎段右衛
門といよめの引返し好む所の大身の鎧とさうりと

打振く伊木半七も駈向ふ半七得さりと渡り合
請つ開つ飛鳥の如くうげめくる段右衛門へ年積
りて三十八歳半七と少年とおのひ悔り何程の事
りあるへと只一突お突ふをんとうけるも半七の身
軽く早うりしうの鎗の下とくり入れた一太刀も
段右衛門と大袈裟うける打果に敵も味方も是を
みて天晴勇士やと褒ぬめのあそ無うげと宿屋七
左衛門兼清の元武藏國宿屋住人鎌倉侍宿屋左衛
門尉光則り後亂なり今へ越前も在て柴田り旗下
一陣の大將なり名ある侍多く通けると見て命の
義に依て軽し弓矢取の名とあそあのへといひすと

大関氏編年

て、鳥居坂の南なる尾の口山と庭戸濱の境より
取てゆへ踏止り慕來る敵を追拂ひ味方と助て
戦ひける處櫻井左吉とるり又見付韋駄天の如く
走來り無二無三に飛入宿屋ふ切てゆへ宿屋の
二尺をうりの又廣の鎗櫻井の家ふ傳へし貞宗の
三尺八寸両方互に聲とけとけを合ける宿屋の
うねて足場より處を撰ひ立たり櫻井の足場あ
く兎角請太刀よのこなりける時味方軍兵競ひ來
りしうへ越前勢總崩と崩とて宿屋もあめを引
立ちしと双方物ころとやなりとびり左吉のわとく
難義の處仕合よく引別と志とく息と繼ける處と

宿屋より弟の洞苗次郎助左吉と目よりけ飛めり
鎗をの棄て無手と組上と下へと揉合けるり左吉
の元より相撲の上手なり念なり次郎助と組伏押
つて首と搔落し紅よ染て立上る處へ黒竹と金の
角取紙の指物さしたる武者のよ能敵な會と狩
場の鷹の鳥立と求むる氣色よと走り來りけるり
宿屋七左衛門と目ありけ鎗を打あり是は筑前守
の侍ふ糟屋助右衛門武則なりと名乗りけ突りけ
けし七左衛門も能敵なり討て柴田へ土産ふを
んと鎗取直し突合けるり助右衛門よりとるると徳
先をあしらのひうの思ふ足跡とるりける處を糟

屋得たりと付入て宿屋う胸板とくさと突貫さけ
どの何りの以てたまらへと七左衛門倒る處と
助右衛門透さ次踏めりて首を取左吉と相打と
ゆふへけ共一旦の別とたりたりる金く助
右衛門一人の手柄といありけり

石川兵助貞友伊木半七櫻井左吉三人と賤岳の
三振刀といふ

平野九右衛門の例の長刀と以て北國勢と薙倒し
懸倒しけるる左近名ある首とも得と如何ありて
も残念ありと猶深く切入ける處柴田侍中村
新兵衛黒母衣と金の六角の出りあり味方より

下りて引けるを見付呼返りし新兵衛あり返
り誰と在を我等の落人なりと鎗と合するも車六
う組て勝負をくると言けるを聞いて心得いと云
より早く長刀と以て中村う太股を一刃にぬり
しうの中村あり理不盡なりと云ありう太刀と抜
て平野と切りくるとつと最も初の手思の外深く
強りけるより終り平野と討とけり佐久間玄
蕃允の味方追々討死し勢のぞろよりあるを見
て使番と味方の備々走り早々引取りへ平野
村の能場所あり彼處に屯しと敵を待たしと告ぐ
り原安井并郷と大後殿とを鉄炮少々打て引

退さけるあり弟の孫六正頼白木の森より押崩さ
是是非はく敗軍より引立ちて引退と味方とさる
み兄の久右衛門のうら成しう影も見へはあひ口
惜し今一度引返し兄の行衛と尋ねんと鞭と揚て
馬と馳と飯浦山の坂のあこ尾へ來めくは處よ
平野權平長泰白紙子の陣羽織より三團子の指物さ
しと寄來り互に見合莞尔と笑ひ參りゆと云ま
又鎗とまことと突合さる然るも孫六り鎗のうら
したうけん土狗頸よりゆつと折げは長泰得
たりと突込處へ孫六と尋ねて小原新七駈來りか
くと見らるる孫六討せしと横合より平野と目よ

懸突めくは長泰めくと見るよりも面倒あり其處
退ゆつと聲と懸小原より向へ孫六の兄と尋ねて
其場と去長泰へ孫六と打めり安うぬとよか
のひ小原と討んと揉合たり小原の北國よ名と得
たる侍りの勝家旗本も在て多くの侍の進退と
もつる剛の者あり今日の軍の次第味方敗軍と
見極め命のさても何うせん是非戦死とおのひ定
めし處はさし一足も引は突合けり終る長泰も
胸板を貫きて倒さげると長泰とさる首と取傍
の石も尻うけあも休息しける處へ北國勢の中
より松村友十郎と名乗權平り横手より鎗と突出

とひ長泰あり返りあむと敵の振舞やその心
み免し相手あらんといひあうと扣らる懸つあ
へし突合げらる友十郎いりやうしたうけん片足
つものさ倒とけると權平踏込てふれと突伏終
首と取てけり

佐久間兄弟賤岳と出る事

并加藤孫六出立美麗の事

佐久間孫六正頼兄久右衛門正次と尋孫敵の中と走
廻り終り兄弟一所み打寄さても今度の合戦神部
兵右衛門と一手みなり中川り小屋と焼立敵と狼
狽をいぬしよるさしも手剛と瀬兵衛尉と追崩

し終り是と討取しるる機十分みし味方の鋭
氣あしりと拂ひしりその跡よせし追邊と追捕
したうしよあひのひもるを銃前守火急し美濃路
より引返しそれと繼ぐ京勢雲霞の如く野あも山
あも満々山々峯々と傳ひ砦々よ加勢しつるよ
う籠鳥の思ひとあしつるあめ共俄し氣力と増鯨
波と作り螺金とあしつるあめともこれの寄手と
追退けあをさる勢いささふり越前勢いつとも
戈と倒あし日頃の勇氣ととう失ひ宗徒とたのし
し面々やうて心々よ落失今いさつうよ敗軍の餘兵
幾許もけしめて柴田の家の難澁此時あるべ

一我等あまひひ一旗門葉の上首たり匠作の滅
亡とらるゝ忍ひをのゝ兄弟一處に討死しと敵
と疲らし暫時も匠作の死を延ばさるゝとあめ
ふいのうよと云ひ孫六尤なりと同心し坂中より
引返し落る味方と勇め追來敵を待りけし天晴
佐久間久右衛門尉盛次り子供と柴田修理進り
妹の子なれなるへくの處へ佐久間り乳母
夫神部兵右衛門尉水野助兵衛りくく來り殊勝ふ
も見へたまふのりか武士いりくあそ有たけと
但若き御身なり軍い今日ふ限るくく柴田殿
の御運の末と見ていへとも此度柴田の一跡りか

断絶とんも口惜りくく爰と我々受取てい早
御退いて玄蕃殿の御成行とも御覧いへと諫むと
とも思切らる若武者の勿々思止まる氣色もい
兩人頻り言葉と盡しつとあも匠作の先途と
見くそあふちと忠とも勇とも申へけととり立
ける處へ上方勢黒と渡りて寄來とい神戸兵左衛
門兩人の鎧の袖と取是非あり退あくと勧めけ
るよあり久右衛門兄弟も諫む從ひ此場と立退け
るあり案の如く越前大い敗と一族即從散々あり
玄蕃久右衛門兄弟此戰場より何地ともあ身と
隠し如何もく筑前守と討兄叔父の鬱憤と晴

けとるおのひーうとも筑前守の威光日々昇
進つるあまう志とて紀州に立うくと叔父の
舊居に忍ひ居たりと云

久右衛門尉安次とて安政といふ紀州あり關
東より保田と稱し北条に仕しと云又保田
系圖より保田山城守長宗の長子佐助知宗佐久間
玄蕃乞の養子とあり天正十一年四月廿四日賤
嶽にて戦死したりと云

美脇坂甚内安治の白綾の母衣に貂の指物とて
馳來水野助兵衛と見るあり道とありと走懸り槍
の柄とりうくと二振三振ありありと鉄壁も透と

と突りける助兵衛と見て小賢とて若め
のうか命二川ありとあさうへい安治さのみ
へ水野助兵衛その方の首に我手ありとのみつ
川又突りて助兵衛慮外あるめのみひ様や
其義あり手柄のゆと見ひてととのひもあ
えの繰出し鎗のゆと見ひてととのひもあ
け入付のけ上段下段とてありとて戦ふたり水
野に北國無雙と名ふ聞えたる剛の者鎗に佐介の
術と傳へし名譽の達人入のり立ちたり半ひけ
る處へ北國の雜兵等崩とてうりけるあり水野
も脇坂も左右へ引別とて水野落れへ落へり

しりとも逆も勝つと軍ふあらし脇坂へも敵を
討得たらし匠作への土産なりとおのひりへ
脇坂と尋ねける安治へ是非水野を討捕んと
是も同じく探し求めけるとて再度めくり合後
たる水野助兵衛と聲うくこの助兵衛何とて後
とへ先あり其方を尋ねると答へあり又鎗
を取直し半時をり突合し何と仕たりけん
水野の槍をのこる松の樹に突たて抜んと
とともたやと枝に太刀を取て脇坂は向へ
内安治鎗を引下入身なりて助兵衛は肩先を
つと切さるとしてあこひるむ處を脇坂おくと

聲うけなりと駈入て突あを直し首を取て立上り
猶も進んで追て行越前方より水野討とりの
果敢く敷防くものも無りし既にあの坂口破
とんとなりけるを見て神部兵左衛門は老練の古
兵とのひ武勇の若さ時より北國に聞えしもの
この急度おのひける様此坂口とあのみ引退
たらし上方勢雲霞の如く押来り匠作もわたり遁
れあふと難うとて上方勢と一方便しく
欺き呉んと坂口を打棄峯に攀上り大音揚て敵間
近く寄来りいめて腕を脱とめりて
覺えし急き御腹めされぬ神部兵左衛門命あり

ん限り防矢仕るべしとのひつゝ弓と取て打番ひ
散々下下し矢射たりけりあまう上方勢中よ
み十六七人射倒されたり案の如く敵此山上入屯
をいと覺ゆるを責上りて高名をよめと呼らるる
付て坂口よ向ひしものとも何も引くべしと山上
へ責上らんとすけるまうり志をくく坂の手の
軍へ延よけり爰よ加藤孫六喜明へ富士山の覺と
着佛洞の具足の胸板脇板入天人の雲よのり
体と時繪したると着たる是は三穂の松原よ下り
あまのつ乙女の駿河舞の心ありその上入紫の母
衣と掛たるは紫雲をふひく景氣なるべし越前勢

もこの出立の珍らしげし軍と止めて見物をり
されとも孫六いよ能敵よ逢日頃このめる十
文字の鎗と打肩け崩立たる雑兵と突伏く尾崎
と傳ひ嶮岨といとくは悪龍の蒼波と沸るう如く
乳虎の幽林と出るふ似たり折しも日ハ暮て暗さ
いらくく外々焼上る火の光とくく歩ませた
ふ處よ浅井吉兵衛則政ハ主将柴田三左衛門勝政
と諫め謀と教えて此手と退を我身の峯傳ひよ引
退けるを後より兩人とも見知たるをのつくまて
我等よ後と見とるをと聲と掛くあり返り亂
軍の事といひ夜軍あり敵味方のおひらもからん

誰あらわらんところ見よ堀尾茂助中村孫平次
渡邊勘兵衛のさし月の影ふ紛となく見へる
互に武邊と磨くものゝふの意氣地ありめくる處
とつて対をへる淺井吉兵衛立止りうの孫六
とこもためらるる真倉と突めくる吉兵衛何人
あると名乗わといわれて知れぬ筑前守の侍も加
藤孫六喜明ありと名乗へ吉兵衛のりくと打笑ひ
越前馬喰の俄侍その方と戦とるも鎗と取て何う
をとんとひひつゝ礫とくこと打へ孫六う運強り
うけん傍に立たる雜兵の眉疵と微塵と碎げの忽
ふ眩きて倒よけり喜明惡し吉兵衛馬喰立の十

文字うけていとおと突く吉兵衛も鎗と合をける一呼一
吸うけてい打打てぬけの上段下段とけりて体ハ電光石火乗
つのゝつ立つのへりやうあふのさつ花々十物ふたと
へと取んとを波とくも兎もめし目さす吉兵衛心の
剛あれと味方の敗北よ心おくもその上月ハ曇り来て足元更
み定るもい木の根もつちと倒ると孫六尋たりとの一の
う終る首を切て悦び勇むと大方あり猶も手あけく北國
勢の逆ると追て散々も突立けとい右往尤往に逃行ける中あも
柴田佐久間う片腕と頼もる北國第一の勇士も安彦彌五右衛門
といふものあり崩とさる味方を助け鎗と以て突拂ひ難めを
扣るにけるめと上方勢突白うされて引足し見へたりけり

實まこと義ぎ前まへ勢せ多たくくりりととも大おほ萌もととままていてい唯ただ一人ひとり目めよよままるるとの働くさききののけけりりけるる安彦あひこ彌や五ご右みぎ衛ゑ門もん技ぎ群ぐんの勇ゆうと振おひひくくるる者もの共ども踏ふ止とめて突つききけけるる上う方かた勢せああれれ為ため小こ谷たにへへままりりと尾お崎さきをを轉まわわりりの其その數かずをを知しりり安彦あひこああののよよのの振お舞まいいてて柴田しばた三さん左さ衛ゑ門もん尉ゑいの備そなへへと一ひと川がわのああららと中なかつ突つ抜ぬけけ馳はりり立たちち有ありり有ありり様さませせも目め覺さずず見みへへけけるると筑前守ちくぜんしゅの小こ性せいは片桐かたこう助すけ作さく直盛ちかみ銀ぎんの柄えい蔓まのささの指さ真ま一ひと文字もじ小こ五ご寄よて見み事こと見みへへたるるのううか安彦あひこ弥や五ご右みぎ衛ゑ門もん是こゝは筑前守ちくぜんしゅの侍さむらいは片桐かたこう助すけ作さく見み参まををんんと聲こゑううくくは彌や五ご右みぎ衛ゑ門もんへへと見返みかへりり珍めづししいい片桐かたこうとのむむの好このとああのの見みののううもすすけけししと是こゝは公事こうじととなりりたたるるややいいど覺さ悟ごととなりりやや助

作さくといいれれ直盛ちかみ打うち笑わらひひとれれ十餘年じゆじゆねんの昔むかしのの某たがひ母ははの御邊ごへんの伯母おほははのれれの御邊ごへんと我われ等らと從弟じゆていとららいいとと親おやと中なかつああれ共母ともははも死しと今いまはは一ひと近年こゝろねん不ふ通つうの間あひだありり何なん条じょう容赦ようじやとと互たがひに物ものののひひろろとと一ひとつつ鎗やりと以もつて突つ合あひひたり安彦あひこ彦ひこの鎗やりの穂ほの素す鎗やりと白柄しろがらとと十六じふろく角かく小こ削くりりたり片桐かたこうの鎗やりの中なかつ身の鎗やり江列えりつ甘露かんろ住すま人ひと天九てんく郎らう俊長しゆんぢやうの作さくなりり雙方そうほう名譽なごゑの鎗やりの達人たつじんなりりとと間まととううくくひ突つききををと更さらに勝かち負まけも見みええいいるるを半時はんじああまりり挑たげげるる片桐かたこう運うんや強つよくくりりげん安彦あひこ彦ひこのつつつつて突つ穂ほ先せん石いしに當ありり折おりりげげるるああと太刀たちと抜ぬききととららむむ處ところを只ただ一ひと鎗やりに突つ伏ふせせて首くびを搔かききててけりりたれれは坂尻さかじり白木しろきの森もり庭戸ていど濱あひらの間まありり去さりり片桐かたこう助すけ

作ハ安彦彌五右衛門と打加藤孫六ハ淺井吉兵衛と
打脇坂甚内ハ水野助兵衛と打平野權平ハ小原新七
松村友十郎と討粕屋助右衛門ハ宿屋七左衛門と討福嶋
市松ハ并郷五右衛門と討加藤虎之助ハ山路將監正國と
討これと賤嶽の七本鎧とのひ石川兵助ハ安井四郎五
郎と討伊木半七ハ大崎段右衛門と討櫻井元吉ハ宿屋
次郎助と討是と三振刀と稱と

重修眞書太閤紀九編卷之四終

重修眞書太閤紀九編卷之五

柴田權六勝久救玄蕃允事

并丹羽五郎左衛門尉於陣中病氣の事

佐久間玄蕃允盛政今年ハ廿九歳其身の剛勇い
と以て人の諫と用ひとたあく大岩山の軍み克
りり上方勢と侮り老練の柴田匠作と却て老耄を
りと云て是と朝り使者の説と用ひと天正十一年
四月廿日の夜賤嶽の軍破と宙刻といりて弥上
方勢み追迫らと并郷五右衛門水野助兵衛淺井吉
兵衛宿屋七左衛門同次郎助小原新七松村友十郎

安彦彌五右衛門山路將監正國戸波隼人安井四郎
五郎大崎段右衛門以下追々戦死しけるまゝ味
方兵氣振る路次ハ嶮岨なり殊更夜いすく曙さ
まハあのおのうさあく落行今ハ漸柴田三左衛門尉勝
政り三千の勢と玄蕃り腹心の者残り少あす討か
されて猶いすく戦半あり此時修理進勝家も旗本
と以て一戦をくゆと思ひ人数操出し去りとも菅
蒲谷の堀久太郎秀政小川土佐守木村小隼人其外
筒井順慶法印中村赤松り輩打出く路次塞さ弓
鉄炮と打りけく手繁く攻懸りけるま賤岳へ向ふ
て玄蕃元と援ふと能く兎角をるうちま玄蕃元

ふ付従ひ一雑兵走來て味方の軍敗せり侍
共多く討し金森五郎八入道德山五兵衛尉等ハ
や既り引退し原彦次郎安井右近ハ別れく引退
し山路拜御宿屋兄弟淺井安房守等の戦死し今ハ
三左衛門尉殿と玄蕃元殿と只二手のこす討あさ
してハ其上ハ上方勢ハ幾千万と云こと知と峯ハ
も尾も満々てハと注進ハ勝家大ハ驚きあち
默然とく物いハ良ありて申けるハ世あも不
思議なるるか木下藤吉郎故大臣殿の御草履より
より出身し侍となり馬り騎さく分対のこ思
ふハこ長濱の城主となり羽柴筑前守といわれ

中國の探題職と許され累代家老たりし我等と同
一程より上り剩故大臣殿の公子達と輕侮し終
ふ今日只今に至り我等と弓矢と取てりくの如し
是併天の我と斃しあふ時といふべし何とて人と
恨むべき今また我股肱と頼り人々日頃の約束
とたりつゝ戰死ありしと嬉しとも喜らるゝとも云
へし詞と知り我旗本の兵士猶一万余人ふ及ふ仮
令の筑前猛帝驚龍の勢力と恣ふるとも何と恐
るゝふ是ん勝家身と以て猿冠者と決戦し且の戰
死ありし人々の供養と備りつゝ最期の軍あり花
花しく志て若者とも眠りよさまはしし但權六

勝久淺見但馬守兩人の早く玄蕃と三左衛門尉と
と迎之來りし幸ふ如法夜中のことなり袖笠印と
めふぐり捨敵とまことて疾々をよ其間と勝の
あつさる上方勢と勝家一あて當て見とへしとい
ふ程と二千餘人と引分て二手となり柴田權六淺
見但馬と出立びそのち勝家のつとこの手に向ふ
へさ上方勢と見るとは若々の筑前守の加勢ふ
氣力と増つし何と螺と吹さつらと摺て鯨
波と揚又此方とて鉄炮つるべ放しよとあし
け敵と見と打出す駈かゆましけるふあり爰そ
よさ責口とおのふ虎口も見定めめつゝ味方と見

此の處々々て戦死したる打殘しの兵士とも何も
重手薄手一ヶ處二ヶ處負ぬのものも無くそれも何
くく逃行つことと落支度とのこぼしけるあり
さしめみ猛さ柴田匠作如何とんと諸軍勢ありぬ
つらして居たりける又上方勢の中より渡邊勘兵
衛へ浅井吉兵衛と目より見知らざるど聲うけ追と一み夜中
ふれの見失ひ一と加藤孫六嘉明討取と口惜さ
残念さいせんめさあく夫より能敵と討らぬと八
方より目と配りて稼さける處より浅野日向守赤尾孫
六西脇彌五衛門相續とて力と合と戦ひける柴田
三左衛門尉勝政ハ兄玄蕃元と一手よりからるると

虎口と見合居ける處より上方勢押重ありて段々
寄來り透間あけよ味方の追々打取と手勢殘
り少なくなつてけるあり賤岳の峯通りと徐々と
引取ける不圖羽柴筑前守の手より鉄炮手稠く
打掛てきたひ來り會柴田三左衛門尉勝政少
も騒ぐは行へさ處まで行のとして人數と押けるよ
餘りよ辛近く付來り一時勝政あり返りその返を
かといふよよ鉄炮の筒先とそろく打をひよ
黒烟曙の雲よたかひさめり敵も味方も見え
るに勝政いて鎗と入よと下知けるよ柴田り手
の壯者とも從横無尋ふ突立る上方勢く追柴田

う手ののの働くアアとおのそぬい念ひ突立ち
と二三町くわと嘯と崩とて引退く其原小弓足輕
と引付鎗とと射させて人数とやとめ峯通りと
又徐々と引て行叔やと玄蕃允盛政ハ我意と募り
て此敗軍及ひ上ハ再度匠作み面と向んとも
恥しく且ハ我々為討死と諸侍の子弟眷屬
のあつらん處も後めとて思ふ程戦ひ此場と去ハ
戦死ととゆと思慮と極め敵の多勢と事ともを以
例の鉄の棒と打めりく扣と立打ひと死生とら
ひみ戦ふると上方勢多く討とげり又丹羽五郎
左衛門尉長秀ハ始より筑前守と援け出陣と一處

ふ北國勢とて敗軍と上方の軍勝つと期至りぬと
あつ他の勢とゆへに只一手旗ととめその
身真先と進み米配と取軍とハ勝たるそ手柄とを
よめ若めのものと志とて下知しけと江口三
郎左衛門尉坂井與右衛門丹羽主税助溝口金右衛
門村上次郎右衛門ととめ南部無右衛門古田五
兵衛翌月文九郎成田筑後同助九郎太田小源太
谷與兵衛青山伊賀櫻井助右衛門上田植木日野種
橋のとも主人と劣らぬ勇士なり士卒とんひま
し鉄炮と打りける中も江口三郎右衛門村上
次郎右衛門南部無右衛門成田筑後等の自身と鎗

と取て鬼神の如く荒廻り佐久間陣をうち破り
玄蕃先と討取んと真先と駈ける處へ北國勢の中
よて武勇拔群とこそあれ原彦次郎旋風の如く馳
來り玄蕃先と引替り丹羽り勢に向て火花と散
戦ふると丹羽り勢も大よ切立らとて五郎左
衛門尉見るよりもさこそあし若者とも軍の心くを
るののそと立上りける時折あし持病の積さ
起り苦痛よ及ひしりとも織田家よて鬼五郎左衛
門と呼としりとの猛将なれいと擬義を以て鎧
の袖よりの心しり身よめて下知しけるいりよ
もつり差込進退りも不自由よ見つるあり

丹羽家の老臣いりとも驚と御持病の御事なり此
場を御引上御保養ありて然るへくと諫め
めとも長秀更に聞入り勇士の習病よ死をると恥
我幸よ此戰場よ死をへ本望なりといひ捨猶も敵
よ向て曳々と聲を上げ叫ひ言りけるあり江
口坂井村上溝口等とてめ敵より主人あそ大事
あれと取寄り抱あしけし長秀大よ怒り我の病
の起りしり汝等あそ氣も魂も失ひつとを
し櫻井助右衛門南部無右衛門青山伊賀望月文九
郎等と輕共よ油断なく鉄炮とて射手と揃
つて敵を射る何も四方よ目と配て我とて顧

るるあし胸と押えて立上り大音聲おほなごゑ下知げりちけり
 いりうふも勝とて見つゝけり剛将きやうじやうの下した弱兵じやくへいあ
 一 大将如此あれい士卒何も心と一川いつがわなす鉄
 炮てうの筒先つづみさきと揃そろて打立矢先うちたてやせんとそろくさしめ
 つめ射けるあまのり北國勢立足きたくにのいきりたてあしと立たくひたり賤岳せんがく
 の栗山修理くりやまのしゆり元羽田長門守黒田官兵衛くろのたにのくわんべいゑいつとも柴
 田三左衛門尉ちのさざゑもんゑい備と目よりけ横合よこあひより突つ掛かしり
 い佐久間玄蕃さくまのげんぱん元原彦次郎もとはらひこじらう一つひとつなりて切立ける
 と丹羽の家老にのえのけらう江口村上丹羽溝口坂井えぐちのむらさきにのへみぞぐちのさかゐいつとも死
 力と盡つとして防ぼと戦いくさひ思おもひく高名たかなけりを見て栗
 山羽田やまのへより三左衛門尉さんざゑもんゑいと打うちとて玄蕃げんぱん元と打取丹

羽へり手柄てしやうよさせと進しんむけし原彦次郎はらひこじらう大身の
 鎗やりと打うちあり栗山羽田くりやまのへより向むかふ栗山羽田くりやまのへり勢せいとも
 原彦次郎はらひこじらう一人ひとりと突つ立たらむ羽田へりて原はらよ討うちる
 へりうと長秀ちやうしゆ下知げりちして江口三郎右衛門えぐちのさんじらうゑもん横よこ鎗やり
 と入いるをけし羽田へり漸しん身みとのうれ味方あじかたの内うちへま
 と入いる原彦次郎はらひこじらうへ丹羽にのへり兵へいとらるより莞尔わんじと笑わら
 ひ長秀ちやうしゆと討うちい安やすけしと盛政もりまさの行衛ゆきゑの心こころ元もとあけし
 へ今日けふのゆるをひりといひついひつ駒引返こまひきかへし玄蕃げんぱん元
 り勢せいよ加かへりぬ嗚呼あゐ時ときあるか僅わずか二町ふたまちをりりの
 内うちより北國勢きたくにのいきり大おほき責破せきやらむ浮足うきあしなりてたぐひ
 ける處ところへ堀久太郎秀政ほりひさじらうしゆまさ以下以下若々わくわくの勇士ゆうし一時ひととき切

大階記加納卷五

二

て出らるる三左衛門尉も玄蕃元も立足しとろふ
切立られ神部兵左衛門ウ勢と合を百騎計とて扣
え居ける處へ權六勝久并し淺見但馬守二千余人
とて迎えける此勢と以て盛返一合戦をんと勇
まけり

柴田權六勝久玄蕃元と諫る事

原彦次郎再度の軍と勸る事

越前勢の内も侍大将たりし不破彦總へ手勢千
余人よと一番ふ落行安井右近も我勢と引纏て引
退さけるよと次弟くふ無勢ふあるのとあはれ
股肱腹心と頼まつる拜卿山路り輩ハ戦死しける

よより玄蕃元も今ハ是迫りとおのひ切し處へ
神部兵左衛門百騎とらりよと馳來りしと此勢
とらりよと今一合戦とおのひ馬の頭と立直し
けると柴田權六淺見但馬守らるのよ見付二千余
騎と真丸よ備つて馳加らり匠作の心入よとむる
來りし由を告らるる玄蕃元益氣力を盛んし
よの備えを堅めとて打立んとやしけるよ原
彦次郎元治使者と以て申けるハ只速に某と共に
引返し一合戦仕あへ某御先仕ハ是死地に入
て一生と得る處よとをけるよと玄蕃元
も尤なりと同心し追來る上方勢の中へ割て入例

の鉄の棒よて四角八面ふたさたて打立しりひ
忽二三十人算とてさしてうち倒さど死生の知を
目さすもくも又いさすもくも實も北國よて鬼とよ
ひけんとあを偽あふね勝あつたる上方勢あふ
なすもあめひけん皆く寄て近付ひ玄蕃先ひ
是と見て三左衛門尉の手へ使者を遣て早々引
返しゆへといとんととと柴田權六郎勝久あふ
止めあふ物よ狂ひあふり斯敗軍よ及ひあふよ
り血氣の勇よ逸りうち負あふとと面あふとて討
死をとあめひ定めあふあふりゆめさうとい狭さ
心中うあ匠作とてよ其事と案しあひさてあを某

と迎よ立あひしあふ軍の習ひ勝も負も時の運あ
り漢高祖の七十餘度大りこい負あひし共垓下
の一戦よ勝あひし終よ天下と一統しあひし
なり拜卿山路以下諸侍の討死たよ匠作のため
大ある損よてい其上よ貴邊討死あふ匠作股肱
と失ひあふよ同し早々引返し本陣よ入て兵と養
ひ重祓ての合戦と心懸あふと諫めげよの玄蕃先
頭と打めりいあふと勝久たしりよ聞某いやくも
一方の大將さうし身なり附従ふ侍とも大り討
死したるを知を顔よ何とて本陣へ引返をへと敗
軍の將へ用ひりさうと云よあふやくもあふ

長詮議ふ時と移し匠作の待くくひとあらん返
と返をも最惜げと早歸りて一旦の返しあれと
も上方のぬく若とも必定ありて返さへげと
勧めしうの勝久あし返し貴邊の左様と宣ふと義
心といひ勇氣といひをさ間あし但本陣の勢も大
形落失て今い旗本をうりなり夫さへ大ふ力を落
しと甚手薄く見請い此節引返しあし何も再
生のねのひとあをささなり疾々思案し替あへや
と響し取付諫むる處へ淺野日向守兼山修理亮羽
田長門守一万計の勢よて押來り玄蕃允と見うい
ひう目りも見違し追取こめて討取と聲々み呼

とら呼らう責來ると見て淺見但馬守神部兵左衛
門惡し淺野日向守いて手柄の初と見ひつとそ
といふまゝと鉄炮六七十挺筒先と揃えて放ちら
けその畑の下とめいゝゝりて八九百余騎ありて
もあゝ懸さうしうの羽田兼山忽あうけ崩され
蜘蛛の子と散らう如く逃退さう玄蕃允のれと見て
淺野り手ふ向ひ四尺五寸の太刀と以て當ると幸
ひ切て廻し前後左右と切倒さうの其数と
しらひささとも上方勢ハ多勢なり入替し攻け
ると玄蕃允只一人弓手馬手ふりけ廻りあるひに
拜し打又ハ拂ひ切太刀ハささらの如くさうと志

おも血み染るるど打ありく敵の中へ懸入懸出十
四五度及ひりりとも薄手一所負もを以氣力よ
こそ盛んなれ浅野り手の者めてあま一裏崩
とて引返しけるを見て權六勝久玄蕃元の鎧の
袖よそりり只今の御振舞異國の樊會へ見も知に
我國よへ又あるべしともあるえは是とあるも御
返し後日ふ大功と立あへりりと頻りみ諫げよ
玄蕃元打笑ひよも事ふ心得ぬ御邊のいひ糸う
かあし見あへ敵の軍ふ負て勢加る味方の勝と
いとも援け加るる新手なり然に當家滅亡の期
至りぬと覺えさう今夜の敗軍某り深入をり故と

おの人もあるへげとも全く尤様の事みあら
は是偏に勝家亡ひあふへと先兆なり其故いうふ
と云ふ前田金森等の如き大将いふとも勝家よ背
さとのまじり所領へ引返をのまらる北國の
百姓一人も陣見舞よ参上とするものなり是全く今
日の軍の勝敗よつて然るも非に日頃より此等
の人々よ疎まれぬより故なり筑前守り手よ丹
羽五郎左衛門尉と始め大勢の大小名のつとも二
心なく親しく暱むのまある江北の百姓も
赤子の父母と慕ふよ似て馴睦と手足の如く働く
と見よ一一定天下いこの猿冠者よ靡さ従ふあ

め衆人の心いそふらち天の心なり天の助る處人
たれり是叛くへけんや盛政りてあらんむとい
匠作も匠作りて在とくへけき盛政此陣と引たらん
ふの何とて暫時も休えあふへと早立歸り匠作と
伴ひ越前へ引退ら其後ともめくも成果あくと道
理と盡く教訓けいハ勝久も又言へと詞あ
さうのむさて居さうけり玄蕃允のひ上りて敵
陣と見さう天晴大勢やこの大勢よて我等一人
と討得ぬとあそくらあけき但加様幾段あも分たを
ハ必定空虚あるへけれい筑前守り旗本へ切入
猿冠者と組て勝負とあそくへけきと云ハ權六も大

ふ悦ひこの究竟の計策と兩人一所よ成て上方勢
と馳向ふ原彦次郎淺見但馬守ああ續いて駈
けいハ上方勢散々よ切立らと四方八方へ逃たり
けり玄蕃允も權六も彦次郎但馬守三方四方よ引
りうとて戦ひける處へ三左衛門尉も返り來り味
方と助けて戦ひあう是も筑前守の旗本へ切入
んと同く馬の首と立直し火水よあれと駈さう
けり權六勝久是と見て何様ゆり振舞あふ人
人うか我とてもおかしく死して共よ四出三途よ
趣くへさなり匠作のよちあらんとも心苦くハ
あめへともあくる處よ來會あう何とて唯一人

逃て引返とへると大ふ勇て見へけいといふ
も仰の如く我々とても何うの逃と申へと御供申
いんんとて先陣に進む人々の長井五郎右衛門青
木勘七原勘兵衛鷺見九藏同源七豊鳴伊兵衛毛家
新内いづとも一騎當千の勇士なり折しも原彦次
即淺見但馬守神部兵左衛門一所に打寄ゆくの如
く敗との味方ふとゆも面々志と一川よか
窮鼠猫とむの理と忘るるあうとことしめゆ
川筑前守の旗本さうと馳うる

重修真書太閤記九編卷之五終

重修真書太閤記九編卷之六

中興武家一番鎗古實の事

并加勝虎之助生筈指物の事

北越の大軍筑前守の神速ある智勇ふ砕りれ四方
へ散亂し中あの日頃名と知と一輩の大形戦死し
諸備いづとも敗走しけるあまう采配と許されし
ふとの者の柴田佐久間と勧めて二度の軍と催ふ
一賤岳へ取て返とへしと議しける處に筑前守の
本陣よりいませつ勝関を上て味方の氣と援けうら
へ總軍のうらませ敵の粉と入てありのをえんと

深意より此式を取行ふと云うと云う味方の勝
鬨の合辭より曳々唯々の次第うねて約束され
是と誤るされとも終入りののれと知れぬ
忽ち探り出されつと云う其後首實檢の式と行
頸帳と記さしげりよ一番戸波隼人頸山路將監
頸加藤布之助討之二番安井四郎五郎頸石川兵助
討之於其場兵助三番拜郷五左衛門頸福嶋市松討
之四番大崎段右衛門頸伊木半七討之五番宿屋次
郎助頸櫻井佐吉討之六番宿屋七左衛門頸柏屋助左門討之七
番小原新七頸松村友十郎頸平野權平討之八番水
野助兵衛頸脇坂甚内討之九番淺井吉兵衛頸加藤

孫六討之十番安彦彌五右衛門頸片桐助作討之と
のち追々あれと記されしとも七本鎗三振刀
と世上よりひそめされし此十人と以て頸帳の
第一と賞美と云ふと云う抑との頃鐘と以て高名
の次第と立るとい根河泉の太守楠正成朝臣の遺
法より楠家の老臣天野了觀の定め処と云うや
あるひ天野了一初源左衛門尉信國とひひ
とも云ふ但正成朝臣の意より造り出されし
いあり上つ代よひらさの八尋の梓とのひ
鎌鉾鯨尾鉾と云ふのものありつるよと云う其
進退の作法と立られしなり其長さの二丈と一丈

二尺のののへ侍の持鎗もちやりより戦の闘たたかある時ときも利
有と云う其優劣と論ろんするも長ながくの一列いっけつも備そなえ
と善よくとそれとも中ちゆうふ就つて先登せんとうをさるゝ自然ぜんぜんの勢せいを
う因よて是こゝを扱さ先の鎗やりといふ扱さ先せんより敵地てきちに入い
と一番鎗やりといふ敵地てきちに入いてさうめて獲とつ所の頸けい
といふ然しかしやうう一番頸けいと定さだむること執筆しつの老練らうれん
よゝると云うたといふ敵地てきちに入いると十町じゅうより獲と
たる頸けいの本陣ほんじんに至いたると敵地てきちに入いると二三町にさんより獲と
獲とたる頸けいの着到ちやくたうより記きといふ往復わうふく廿町にじゅうと五六町ごろうの差
あるう故ゆゑやうとうりや然しかし著到ちやくたうの吟味ぎんみ偏ひとは戰場せんじやうの
武功ぶくうの数かずも依よて指南しゆばんと請まがへといふへるやう但今

度十人の働はたらけ坂尻さかじりより白木の森しん廣戸ひろと濱はまとの間
より七五町十町宛隔あひだりより同時どうじの着到ちやくたうあれ
比類ひれいある趣感しゆかん状じやうも載のせられ小袖こそで廿重にじゅうじゆうも知行ちやくちゆう五千石
の折帛せきやくと出いされより勝鬨かちど頸帳けいじやうの式しき終はつとそ
儘まま筑前守ちくぜんしゆうたち上ありてあの競けいひより修理進しゆりしんの本陣ほんじん狐
塚うづまも馳向ちむかふよりあれと討破うちやんと囊中のうちゆうのののを取
よ同一どういつと士卒しゆうそをさあられける處ところへ美濃守みのしゆう秀長ひでながの
使者しやより来きり注進ちゆうしんいける越こ前勢こゝ總敗軍そうばいぐんとふ
り右往みぎむか左往ひだりむかより逃走たうそうりゆひつる處ところも柴田しばた權六ごんろく同三
左衛門尉ざゑもんゑい佐久間さくま玄蕃げんぱん元原げんげん彦次ひこじ即神部すかむべ兵左衛門へいざゑもん敗
軍くわんの恥辱ちじよくと雪ゆきめんとて必死ひつしより返かへり来きりそ

の勢やると破竹の如く味方あれを防ぐも力と竭
し手と碎さしへとも敵兵のつても死と顧らぬ働
さし間味方頗る難義及ひい急さ御加勢へ
と喘さ言上をうの筑前守打笑ひさもある
然とて何れとの事とり仕出さへさといさる
る處へ来山修理亮羽田長門守あかき使者と以
て越前勢二千餘の勢と三手ふて大返し返
の中ふも佐久間玄蕃原彦次郎り働と抜群
味方大に駈惱され浅野日向守浅井彦次郎赤尾孫
助討死し當方ふも難義及ひい急さ御加勢
と被下へしと注進しゆると筑前守聞ぬありと

味方の若者とも昨夜の戦功異國へし我
國よのいしまし聞も及ぶ別しと希之助市松助右
衛門權平甚内助作孫六あり仕とり當代無類の勇
士一人當千といふし然ら其方共七人の敵七
千に向ひつへし然る越前勢はつり二千餘を
さへ不足あるへいさとも罷向て切棄げ急け
と下知しあへいしつとも大に悦ひ我先ま馳出
しゆる加藤虎之助立ちへり筑前守の前みゆ
みより清正美濃路より火急に御供仕りさ一の
と大垣に殘し置い因て只今さし御許と蒙りゆる
間生笹の指物用ひ申度いあされ御許と蒙りゆる

とやと言上りける時筑前守聞とて例の大音ふ
ていり虎之助生笹とさびる生梅の例とあり
あへ異様のさしものひむりあり戰場とて自
然の軍切よりて用ひしなり平常のさしもの
取落し軍ふのそんで車く計りて面白く
け清正との侍り風情もあつた望うか能々案
て見ゆへとて更よゆるか清正承り何り
故あると御説と覺えぬ敵のそと近付たり長
長と考ふと時よゆるといひ終り直り越前勢
みうけ向つて清正即等木村又藏井上大九郎加
藤清兵衛前後左右引とひ烈風の木の葉とさそ

ふう如くうげとる清正と見返り森本儀大
夫と呼青竹一本切來とといひ付又原彦次即り手
へ向ひけし鷲見九藏同孫四郎磯貝九郎作二三
百許よて真先よ進む清正莞尔と打笑ひ殊勝氣よ
見つる物ともりかひて其首打落しとくれとゆと
雷の如き聲と發しとけ向ひ手の下よ突ふとて
い頸と取取て笹の枝よ着鷲見兄弟とてめ十
一までみありとていさし太なる竹あれともあ
るひ屈げるとそのまゝ本陣よ送り着到り記さそ
しと筑前守見あひ出來たりあ席之助られり
生笹のさしもの勝手たると許されとてやう

そのく生梅と箴よさしたるハ梶原景季の矢種を
めくをむりーの例はう三角柏と笠印よをーハ
山内の經俊伊勢の國佐々良嶋よての古事なり筑
前守もよとの事の思ひ出して清正の軍功を勸
めらるる事知とけり

賤う嶽七本鎗の面々働さこの事

并盛政一人筑前守規ふ事

去程よ北國勢筑前守の本陣ふ切入んと勢猛く引
返さるるハ上方勢大よ仰天し淺野日向守淺井彦
八赤尾孫六郎西脇彌右衛門等枕とありへて戦死
しけるふり北國勢のゆく力と得勝関と作りぬ

け大山の雪の壓う如く又滄海の潮の湧ふ似てあ
ひた〜〜寄必死よりて働さけるやとよ若々
しうのつとも本陣へ使者と仕立て加勢と請ふと
櫛の岨と引う如く北國勢の中より原彦次郎の手
ハ加藤希之助ふ切破らと鷲見兄弟と〜〜め悉く
打取と頸ハ生笹の枝よ付らと清正の武勇と顯て
しけるふり忽ふ崩と立しりハ彦次郎もせん方
どく一方打やふり何方ともなく落失たり又福嶋
市松ハ淺見但馬守の手へ向ひ面もあつて切う
うけるその烈〜〜旋風の如く早めうけるふり
但馬守あしらひう松ちと浮足と見るゆゆか福嶋

侍ふ福嶋十兵衛のれの後丹波といひ男なり吉村又右衛門桂十兵衛あし聲々名乗けけ主ふ劣らぬ責つけし但馬守一まのつとを引退さ玄蕃と一手ふあしとゆとおのひ勢とよめて引上んとこを福嶋見るあり道をやりと追掛鐘と握て一突つくと見しは但馬守り押付の板より胸板よと穂先白く突出たれ何り以てたまるへ馬より落ちて死してけり大将を討つこの浅見り手いさて敗走し蜘蛛の子の散如く逃失けり神部兵左衛門原勘兵衛一手ふありて引返し能軍しける糟屋助左衛門は追立られま

の鎗と合をひるは何とう仕たりけん神部も原も同く粕屋は突あをりて討しけり青木勘七長井五郎左衛門尉は柴田權六と一所に進んで上方勢と追まくり勇と立て此勢と抜さ本陣は切入るゆと競ひりける處へ平野權平あまはましと馳めりし青木も長井も平野と打て其後本陣へ向ると健り立て戦ふゆと柴田伊賀守の與力神谷越中守足田左近左右り平野を援けて討くる平野の名譽の射手ありし弓追取切て放さるあやまは青木勘七馬より真逆に射落されし是とい見と共見ぬより北國

勢猶もくげく切らるるを權平二の矢はく長井
五郎左衛門と射落たり二人の大將ありて
てしうの其手の軍兵散々ようちをさして引退く
されとも如法深夜のことなれは木蔭谷道暗く
思ひうけあて討つものも多うりけり柴田權六
勝久の年猶若くありけしは勇氣よるありて真先
は進み戦ふと足田左近大将ありと見知りては只
一鐘のとき競ひめぐるを權六目くらみ見付との
は匠作の思とけあう伊賀守と勧めて筑前守
み従らうめし不忠めのおのひしとあといひさよ
は繰出ひ鎗と請とんし左の肩と志とくうみ突と

しうの左近そのまゝ倒とふしたるを暗夜あれは
首へ取とを神谷越中守も同く權六と目よりけ
進み近川くと權六う乳母夫本條忠次うけ寄て神
谷う兜の真甲と割と碎けよと志とくうみ打と
て越中守尻居よととうと倒としう共權六う進
行と忠次心元ありとあめは神谷と棄ててしう
行然るは權六一向本陣へうけ入るめと思ひつ
進み處は片桐助作馳來り柴田と見て馬駈居權
六殿と見たり何処とさして落あふそと聲めく
は權六莞尔と笑ひ落行と何事を筑前守み面會
せむと思ふよもう本陣へ行けり案内とよといひ

大朝臣編六

しうへ助作ささり修理殿の子息ありしと案内仕
らんと鎗を打振立向へい権六の跡より毛屋新内
豊鳴猪兵衛進み來ると見て加藤孫六あまひや
と駈來る助作權六と加藤渡り毛屋豊鳴と左右
と請て戦ふさう豊鳴へ片桐と棄て加藤ふ向ふ加
藤豊鳴と見知さう只一鐘と突りさう猪兵衛へ
太刀と打振さう孫六ふ切りさう兩人志さう戦ひ
けさう如何さうけん猪兵衛脇腹を志さうさう
突れて息絶たり毛屋新内あれと見て權六と討を
しと助け此場を落たりけりめくて助作孫六一
處と打寄敵と待處と柴田三左衛門尉勝政なりと

名乗るけ來り筑前守の本陣へ何處とと血眼と
つてのさうと見て御供申ひんとと北國勢百
騎とさう真さうと駈來ると脇坂甚内とさうも
見付是れ我等り得分ありとさうひありさう手の者十
三四人と真先と進めて馳向ひけるさう柴田勢へ不
案内あり爰の木根とこの岩角と踏めさうつま
つと倒れ五六十餘騎の討とさうけりさるとも越前
勢大りと今日と限りと思ひ切るとさうの親討れ
の子いあれと助んとをけ子死をれとも弟のけり
違ひ相手を嫌ふ戦ひさうとも上方勢へ雲霞の

如くも案内者あれはあとの谷うけのつり射のつり射あり切て出突りつり射つり射射け
 るるも越前勢より打破らして残りありありも
 珍らしき軍なり関の聲矢叫ひの音天地も震動を
 る計あり勝家の本陣狐塚より賤岳まで七里半
 づいひの如くの手攻の合戦ありとい知れぬか
 く漸夜明くあつてあつて味方再度敗軍を由と
 聞つてもせんうさか佐久間玄蕃元はその身
 壯健よりあつても打物の達者荒馬のりの名人か
 とい如何なるもしく筑前守より近つた一うちみ
 討取んと兜の緒とめ鎧の上帯つり引結ひ鹿

毛なる馬の八寸は餘る北國第一の名馬も打の
 う賤岳の間道の人もうよくね捷經より筑前守の
 本陣の後に志して歩まを難く走り近つて見え
 り近習の面々いつても陣々へ分遣なり軍を分
 た急ありと聞えりあつて馬廻りの若士多く處々
 へ走向て間あけとい玄蕃元う推量の如く本陣ハ
 誠と無人なり辛くして柵門の内へ走入て見
 實も筑前守只一人床机のりて軍の注進と待
 居たり玄蕃元あつて嬉しく千騎万騎と打取
 とも此一人のうさか匠作の本意とげん不思議
 なるう天道のりあれは此人を以て某と授け玉

ひげんして打ひしとて吳んどと大音あけ佐久間
玄蕃えりの筑前守と聲くは筑前守尻目よと
て少もさそりひ玄蕃えり推参あり罷退けと云て
て躓つと倒る玄蕃えり怒て立上り鉄の棒を取のへ
只一打とあけ寄の膝しひとて進得を去とてめく
追近寄たり何れも一打うたむと立上り腕
腕いこくと取落と捧はそのまら打あけくもるり
の谷へ落入たり盛政とさうよいつたちと太刀と
抜膝とり寄て打んとそれとも腰たぐはあまりの
不思議よめく見と筑前守と見しはそれあり

て霜といく老人あり盛政よんく驚と正し
く筑前守と見つるののと何れのあるやとあり仰
の眼と定めてたしり見と筑前守秀吉とる
めよあかこの幕の内より小袖一川打らあり小具
足入りりよ太刀持て悠々と出来り玄蕃え神妙ふ
り某其方と討取と安けと此度のさしゆるは
罷退けといひとて又幕の内へ入しりひ玄蕃えお
されとて大膽不敵の秀吉うあさりとて此まらに
引返さんも口惜し如何をんとおのひらふとせ
んうしひのけまの立上りいりよもしと一太刀と進
めり小膝疼しひと只一足も歩すれととくもる

間鹿毛馬も起上りめと来路へ立向ひ二聲三
聲嘶けの玄蕃元その意とさとり然に引返を
何よしても天運強と筑前守と心のうちと打傾ふ
こ馬も打のり柵門を出と馬もあつて進こゆ
くさりととも餘り口惜と追来り面を合を
あつと本意もとけをあめくと引返さんと云甲斐
あつと人のやのそん今一度引く筑前守り陣
中と何ともあつとやと思ひくへけきの玄蕃
元馬の首と立直ひあつた馬さつと進すと又引返
して帰らんとそれの足もやく進こびるふあり玄
蕃元心あつて二三町引返し余りもくわつと振

めく見よ筑前守の陣の邊俄人馬の立さ
く音のよひとととととの数幾千万といふとと知
そ玄蕃元正しく無人と見つる筑前守の旗本もあ
の大勢の立たた何處に伏て置しやらん然もく
武勇のさのそ怖くうぬと武畧の我々及ふ処
あつとめくそ勿々容易と此人と討取んと凡人
とさつとあつと心の中も思ひしと再度の
方便と工夫と玄蕃の賤岳より引返せしとや
抑筑前守り移て玄蕃元り忍び来らんことを悟りつ
よの長濱の某寺の長老と呼寄筑前守のめく
こととめくよ床机のめくらとと玄蕃元心をく

おの 筑前守と見まうへーとひう本陣まこと無勢
ありしりともゆゆ長濱近所の郷民等ふふれ渡
し本陣ま事あらん時相圖次第ふ馳集まこと約束
しるるあうり玄蕃えり来りし時うゆての相圖と
あしあうらひゆとも約束たりへて走来りしふれ
とも元より郷民の事よと尤迄の義勢もあうりし
ふ玄蕃えり驚と返りしなり

重修真書太閤記九編卷之六終

